

## 嘉手納飛行場

沖縄県中頭郡嘉手納町・沖縄市・中頭郡北谷町の広大な面積に広がる極東最大のアメリカ空軍基地。嘉手納空軍基地、あるいは単に嘉手納基地と呼ばれることも多い。1945年4月、米軍が沖縄戦で旧日本陸軍中飛行場を接收し、その後さらに拡張した基地である。

3,700mの滑走路2本を有し、約100機の軍用機が常駐する極東最大の空軍基地、在日空軍最大の空軍基地である。面積においても日本最大の空港である東京国際空港（羽田空港）の約2倍である。かつてはスペースシャトルの緊急着陸地に指定されていた。

空軍基地の拠点としてだけでなく、居住地区には、学校・図書館・野球場・ゴルフ場・映画館・スーパーマーケット等、多種の米軍向け支援施設を包

有し、嘉手納マリーナ地区は米軍人等の福利厚生施設でもある。

嘉手納町の面積の82%が嘉手納飛行場や嘉手納弾薬庫地区に占有されており、現在、嘉手納町の住民は残り18%の住居区に暮らす。「道の駅かでな」通称「安保の見える丘」があり、滑走路の北東側や戦闘機の駐機場周辺を見ることが出来る。嘉手納町の歴史を紹介する常設展示もある。東京都品川区にほぼ匹敵する面積（東京ドーム約420個分）を、沖縄本島中部に占めている。

嘉手納飛行場が占める面積のうち、9割以上が私有地である。沖縄戦の占領以降も土地の強制接收で拡大し地主も11,450人になる。このため年間239億円をこえる賃借料が、日本の税金で土地所有者に支払われている。

### 事件・事故

嘉手納基地では近年、外来機が膨大に増え、嘉手納基地所属機による事故だけではなく、外来機による落下物事故、緊急着陸も増えている。また、嘉手納基地所属兵士の飲酒運転逮捕も、2019年の在日米軍のリバティー制度緩和以降急速に増えている。また嘉手納のF15戦闘機は、油圧トラブルが多く、緊急着陸の頻度が多い。

### 騒音と爆音訴訟

離着陸時の飛行コースは、民間地域の上空をも通る。このため周辺地域では日常的に騒音に悩まされている。嘉手納基地騒音訴訟として、騒音軽減を要求する内容の訴訟も提起された。

1996年に日米両政府が合意した「航空機騒音規制措置」では、午後10時から午前6時までの飛行、地上活動の制限が定められているが、米軍の運用上の必要があれば除外できるとする規定があり、十分守られていない。



嘉手納飛行場

〒904-2172 沖縄県沖縄市泡瀬1-31-23  
TEL: 098-934-1231 FAX: 098-955-4851  
<http://umarijima.com/>



# 沖縄市教育民泊 平和学習

基地の街沖縄市「戦後文化の歩みと現状」を学習



## 沖縄市戦後文化資料展示館 ヒストリート

開館は、戦後60年目を迎えた2005年9月7日。この日は沖縄戦における日米両軍の降伏調印式が沖縄市森根「現在の嘉手納飛行場内」で行われた。資料館が位置するコザ地域そのものも嘉手納基地に隣り合う「基地の街」として形成された経緯がある。このような特異な歴史を経験した街を紹介しているのが「ヒストリート」であり戦後文化を中心に展示を行う資料館は県内でも珍しい。

資料館はそれ専用に建設された施設ではなく、コザゲート通りにある既存の建物の1・2階を改装して展示室にしている。

旧館は施設こそ小規模であったが施設のある周辺は米兵たちが行きかう「中央パークアベニュー（旧ビジネスセンター通り、BC通り、センター通り、とも）」や1970年に起こった住民蜂起コザ騒動の現場となっ

た「コザゲート通り」がある。「Aサイン」バーをイメージした館内にはベトナム戦争中に賑わったコザの街の様子やコザ騒動、収容所から始まった戦後の市民の暮らしなど充実した内容となっている。



ヒストリート外観

### 展示内容

- 沖縄戦における日米両軍の降伏調印、九糎臼砲などの日米両軍の兵器
- コザの街の米兵の写真
- コザ騒動・毒ガス移送資料
- ジュークボックス
- ジュラルミンで再生した生活用品や住民が生活に流用した米軍備品
- 戦後の子供たちのおもちゃー手りゅう弾も一緒に並べられているが沖縄戦から間もない頃は子供たちが手りゅう弾で遊ぶことがあり、事故も多発した。



ベトナム戦争へ出兵した米兵が帰還した時に取りに来るとサインを残していった紙幣…



## コザ騒動

コザ騒動とは、1970年（昭和45年）12月20日未明、アメリカ施政権下の沖縄のコザ市（現在沖縄市）で発生したアメリカ軍車両及び施設に対する焼き討ち事件である。

アメリカ統治下の沖縄で人々が怒りを爆発させ約80台の米軍関係の車両を焼き討ちした、当時米軍からも「おとなしい」「従順」とみられていた沖縄人がこのような行為に出た背景には、沖縄戦から続く哀しみの歴史や、米軍人・軍属による犯罪を罪に問うことが出来ない不条理の蓄積があった。1963年那覇市の軍道1号（現国道58号）青信号で横断歩道を渡っていた中学生が突っ込んできた米軍トラックにひかれ死亡、赤信号を無視して人命を奪った米兵は軍事裁判で「太陽の光がビルの壁に反射して信号が見えなかった」という趣旨の主張をし無罪となった。騒動が起こる

3か月前1970年9月には糸満市で、酒に酔った米兵が運転するスピード超過の車が主婦をひき殺したが、12月11日に上級軍法会議は「証拠不十分」として米兵に無罪判決を下していた。

土地が奪われ、自治が認められず、事件事故で命が奪われても罪に問うことさえできない。この理不尽の蓄積が復帰前の沖縄の姿だった。コザ市は嘉手納飛行場、キャンプ・レスターを抱えアメリカ軍人や軍属相手の飲食店、土産品店、洋服店が立ち並び市民には基地への納入業者、基地建設に従事する土木建築者基地で働く軍雇用員も多かった。事件当時ベトナム戦争の最中でアメリカ軍関係者の消費活動は激しく、市の経済の80%は、基地に依存していた。

### アメリカ軍人・軍属による犯罪

アメリカ軍施政下の沖縄で、沖縄の人々は日本及びアメリカの憲法どちらにも適用されず身分的に無国籍状態のきわめて不安定な立場に置かれていた。

騒動の直接のきっかけは20日未明、コザ市の大通（現国道330号）で道路を横断していた住民をアメリカ兵運転の車がはねた交通事故だった。

軍警察と琉球警察が現場検証にあたったが、付近の歓楽街から集まった人々は、これまで起きた交通事故での米軍側の処理に不信を抱いており、一帯は騒然となった。さらに事故現場近くで別のアメリカ兵による追突事故が発生。興奮した群衆は事故車やMPに石を投げMPカーをひっくり返して火を放った。MPは空に向け数発、威嚇発砲をしたが、それが逆効果になり事態は收拾不能な状況になった。群衆は軍用道路（ゲート通り）で米憲兵や軍関係の車両を次々と横転させ、炎上させた。午前7時ごろ憲兵の警備で群衆が退散するま

で、騒動は約6時間に及んだ。加わった数は約5,000人ともされる。被害車両82台、米側56人、地元住民32人の計88名が負傷した。「コザ騒動」の前日の1970年12月19日には隣の美里村で毒ガスの即時撤去を求める県民大会が開かれ、約1万人が参加していた、ここでは糸満市の主婦轢殺事故の無罪判決にも抗議していた。

このようなタイミングで立て続けに起きた米軍関係車両の交通事故「この前の糸満の事件と同じように無罪判決になるのでは」そこに居合わせた人々の間で不満が爆発し、反射的な直接行動が一気に広がった、それは群衆心理による盛り上がりもあったかもしれないが、騒動には不思議な秩序があった。略奪は起きず、死者も出なかった。暴力が人に向かわず外国人車両や建物だけを標的としていた。通り沿いの建物に延焼しないように、火をつける外国人車両は道路中央に集められた。

「興奮の中に冷静さがあった」